

## いわゆる推量の助動詞「らし」の本質について

—あらし・けらし・ならしとの関連において—

鎌倉暄子

いわゆる推量の助動詞「らし」については、松尾捨治郎氏の詳細な考察以来、その用法を甲・乙二つに分類し、

(甲) らしの附いた動詞の表す動作又はらしの附いた動詞を述語とする文の表す事実が不明な場合、之を推定的に表現する。

(乙) らしの附いた動詞の表す動作又はらしの附いた動詞を述語とする文の表す事實は明かであるが、基の原因の不明な場合、之を推定して表現する。<sup>(注1)</sup>

とする考えがほぼ定着している観がある。しかし、いわゆる推量の助動詞「らし」の意味機能は、そのように甲・乙二つの用法に分けて考えるべきものなのであろうか。大いなる疑問がある。筆者は先に、「らし」の本質的意味機能

は推量ではなく、「言語主体者の主観的、情意的な、時には断定的と思われる事柄を、婉曲的に表現することにある。<sup>(注2)</sup>」と述べたが、その考えは今も変わっていない。ただ、「らし」の本質、成立に関して未だ詳しくは述べておらず、考えることもあるので少しく言及してみたいと思う。史的考察は次稿に譲り、『万葉集』を中心として、その成立、語法を種々の角度から再度考察してみることとする。

### 一

我が背子がかざしの萩に置く露を清かに見よと月者照良思<sup>ちし</sup> (十・二三三五)

靱かくる伴の雄広き大伴に国栄えむと月者照良思<sup>つきはてるらし</sup>

右二首は、松尾捨治郎氏が言われた「らし」の乙の用法、「らし」のついた語の事実が不明なのではなく、その原因が不明なのを推量した用法とされる例である。つまり、月が照っているのは眼前のことであり、事明の事であるから、それを推量しているのではなく、「清かに見よ」と「国栄えむ」という原因・理由を推量しているというのである。しかし、助動詞の機能については種々の考えがありはするが、時枝誠記氏の言われる如く、「表現された事柄、詞に対する話手の立場の直接的表現であり、詞との結合によって始めて具体的な思想の表現となるもの」と言うことができ、右の例の場合、直上の動詞「照る」と結合して、具体的な思想、陳述を表わすものであり、「らし」が推量の意味を有するのであれば、動詞「照る」そのものを「らし」と推量しているの見なすべきものであり、「その原因・理由」を「らし」と推量しているとするのは、「らし」を推量と決めた上での考えであり、かなり無理があるように思われるのである。

玉に貫く花橘を乏しみし此の我が里に伎奈可受安流良之(十七・三九八四)

の例も前掲の二例と同様の例であり、ほととぎすが「来鳴かずある」ことは不明なのではなく、その原因・理由、つ

まり「玉に貫く花橘が少いので」と推量しているとされているものであるが、その原因・理由は言うまでもなく「等毛之美思」の例文からも明白なようにミ語法から来るものである。「らし」が推量の助動詞であるならば、ここはあくまでも「来鳴かずある」ことが不明であり、推量していることにならう。この歌は左注に、

霍公鳥者立夏之日来鳴必定 又越中風土希有 橙橘也 因<sub>レ</sub>此大伴宿祢家持感<sub>ニ</sub>發於懷 聊於裁 此歌

三月廿九日

とあり、題詞と、そしてそれに続く歌に、

立夏四月既経 累日 而由未<sub>レ</sub>聞 霍公鳥喧 因作恨歌

二首

あしひきの山も近きをほととぎす月立つまになにか来鳴かぬ(十七・三九八三)

とあることでも明らかかなように、霍公鳥が来鳴かないでいるのは明白な事実、現実であり、とても推量の意など入り込む余地のないところである。されば、「来鳴かずあるらし」と詠まれた「らし」は果して推量の意を有していると言えるであろうか。

ところで、「らし」の甲の用法、例えば、

春過ぎて夏来良之白妙の衣乾したり天の香具山

(二・二一八)

の歌における「らし」は、天の香具山に衣が乾してあるのを見て、春が過ぎて「今はもう」夏がやって来たらしいと、「現在ただ今の時点において推量するもの」と注4とされている。つまり、「らし」のついた語「夏来たる」という事を客観的に推量しているというのである。乙の用法とは違って、一見、意味的にも語法的にも無理は生じないようであるが、その表現内容からはどうであろうか。現在の我々よりもつと直接的に自然を相手に生活していたと考えられる当時の人々にとって、天の香具山に衣が干してあるということそれ自体、春が過ぎて夏がやって来たことを示すことに他ならず、当時の生活体験からして自明のことであつたのではあるまいか。

ひさかたの天の香具山この夕霞棚引く春立下はるたつらしも（十・

一八一二）

古の人の植えけむ杉が枝に霞棚引く春者来良之はるきたららし（十・

一八一四）

の例は、卷十巻頭に見える春の雑歌七首の中の例である。勿論前掲の例と同様、従来から言われている様に、根拠ある推量としてもそれ程齟齬を来たさない例ではある。しかし、天の香具山に霞が棚引いていることは、この一連の歌、例えば、

子らが手を卷向山に春されば木の葉しのぎて霞棚引く

いわゆる推量の助動詞「らし」の本質について

（十・一八一五）

の例を挙げるまでもなく、春になったことを示していると見えよう。

冬過ぎて暖来良思朝日さす春日の山に霞たなびく

（十・一八四四）

鶯の春成良思春日山霞たなびく夜目に見れどもはるになららし（十・一八四五）

の例にしたところで、

風交り雪は降りつつしかすがに霞たなびき春さりにけり（十・一八三六）

月数めばいまだ冬なりしかすがに霞たなびく春立ちぬとか（二十・四四九二）

等の例を対比すれば、春∥霞の図式が成立するのは明らかである。このような場合、春になったらしい、春が来ているらしいと表現するであろうか。同じような例は、

梅の花今盛りなり百鳥の声の恋しき波流岐多流良斯はるきたららし（五・八三四）

今よりは安伎豆吉奴良之あしひきの山松かげにひぐらし鳴きぬ（十五・三六五五）

等数多く見え、変るところはないのである。八三四番歌は、「梅花歌卅二首并序」における、一連の梅花の歌を参照すれば明らかのように、梅の花が咲くと言うことは春が来て

いることを示しているのである。まして、この歌は「梅の花今盛りなり」と断定しているのである。三六五五番歌は遣新羅使の歌であるが、国を出てもう早や秋になったと嘆いている歌である。ひぐらしが鳴いたということは、当然秋になったということなのである。霞Ⅱ春、梅の花Ⅱ春、ひぐらしⅡ秋等ということは全て、当時の人々の生活体験から来る確信的なことがらではあるまいか。強いて言えば、確信的なこと、当然そうであることを婉曲的に表現していると考えられることは出来ないであろうか。よし、現代語で言えば、「〜のようだ」と口語訳はしても、「〜だ」「〜そうだ」と言っているのと同じだと思われるのである。

み雪降る冬は今日のみ鶯の鳴かむ春へは安須爾之安流良之（二十・四四八八）

の例は、題詞に「十二月十八日於大監物三形王之宅宴歌三首」とあり、『代匠記』に「アスニシノシハ助語ナリ。十九日立春ニテ有ケルナルヘシ。下の二十三日ノ歌ヲ合セテ見ルヘシ」とあることから、「明日にしあるらし」が推量表現だとは思われないのである。

塩津山打ち越え行けば我が乗れる馬ぞつまづく家恋良霜（三・三六五）

妹が門出入り河の瀬を速み我が馬つまづく家思良下（七・二一九二）

相思はず公者在良思ぬば玉の夢にも見えずうけひて寝れど（十一・二五八九）

我妹子し阿乎徳良志草枕旅の丸寝に下紐解けぬ（十二・三一四五）

家の妹る和乎之乃布良之真結ひに結ひし紐の解くらく思へば（二十・四四二七）

我が妻は伊多古非良之飲む水に影さへ見えて世に忘れず（二十・四三二二）

我が故に妹奈氣久良之風速の浦の沖辺に霧たなびけり（十五・二六二五）

等の例は全て、当時の人々の俗信に基づく生活体験であり、確信的とも言えるものである。馬がつまづくことは、家人が自分を恋い慕う証であり、夢に相手が現われることは、相手が自分を思っているからこそなのである。

我妹子がいかに思へかぬば玉の一夜もおちず夢にし見ゆる（十五・三六四七）

夜昼と言ふ別き知らず我が恋ふる心はけだし夢に見えきや（四・七一六）

の例がよくそのことを示しているのではあるまいか。また、君が行く海辺の宿に霧立たば我が立ち嘆く息と知りませ（十五・三五八〇）

沖つ風いたく吹きせば我妹子が嘆きの霧にあかましも

のを（十五・三六一六）

大野山霧立ち渡る我が嘆くおきその風に霧たち渡る  
（五・七九九）

の例が示すように、霧は嘆きの息であり、眼前に棚引く霧は、愛しい妹が自分を思い慕っている嘆きの息なのである。下紐が解ける事や水に姿が映ることも全て、愛しい妹が自分を思っているその証拠であり、何よりも確実な証しとして当時の人々に信じられていたことである。決して推量など入り込む余地などないものである。

春日野に煙立つ見ゆ少女等し春野のうはぎ採而煮良思  
文（十・一八七九）

東の風伊多久布久良之奈呉の海人の釣する小舟漕ぎ隠  
る見ゆ（十七・四〇一七）

海人少女玉求良之沖つ浪恐き海に船出せり見ゆ  
（六・一〇〇三）

都武賀野に鈴が音聞こゆ上志太の殿の仲子登我里須良  
思母（十四・三四三八）

天の川梶の音聞こゆ彦星と織女星と今夕相霜（十・  
二〇二九）

海人娘子棚なし小舟榜出良之旅の宿りに楫の音聞こゆ  
（六・九三〇）

やすみしし 我が大君の 朝には とり撫でたまひ

いわゆる推量の助動詞「らし」の本質について

夕には い寄り立たしし み執らしの 梓の弓の 中  
弭の 音すなり 朝狩りに 今立須良思 夕狩りに  
今他田渚良之 み執らしの 梓の弓の 中弭の 音す  
なり（一・三）

ぬば玉の欲波安氣奴良之多摩の浦に求食する鶴鳴き渡  
るなり（十五・三五九八）

の例は、実際に見たり、聞いたり、聞こえたりしたことを前提とした、一つの表現パターン化した「らし」の用例である。言語主体者の視覚、聴覚に基づいたその表現内容は、当時の人々の生活体験からすれば、疑いの余地のないことばかりである。「らし」が「漠然たる推量ではなく、ある根拠をもってする自信のある推量である」とされるのも当然のことである。しかし、「自信のある推量」とは一体どういうものであるか。

ところで、「らし」は疑問語と共に用いられた例は、上代においては、

今日も加母佐加美豆久良斯（雄略記）

諾し訶茂蘇我の子らを大君の菟伽破須羅志枳（推古紀）  
の二例以外は見られず、

黄葉する時尔成良之月人の楓の枝の色づく見れば  
（十・二二〇二）

うちなびく春避来之山の際の遠き木末の咲きゆく見れ

ば(十・一八六五)

秋萩の散り行く見ればおほほしみ妻戀つまこひ為良思すらしさ雄鹿鳴つまこひすらし  
くも(十・二二五〇)

天の原振り放け見れば天の川霧立ち渡る公きみ者来良之ききたるらし  
(十・二二〇六八)

家の妹わをろ和乎之乃布良之真結しのぶらしひに結ひし紐の解くらく  
思へば(二十・四四二七)

相思きみはず公は者在良思あるらしぬば玉の夢にも見えずうけひて寝  
れど(十一・二五八九)

鶯はるなるらしの春成良思春日山霞棚引く夜目に見れども(十・  
一八四五)

峯の上に降りおける雪し風のむた此間散良思春にはあ  
れども(十・一八三八)

の如き例が示す通り、確定条件しか受けず、決して仮定条件を伴わないのである。先の記紀歌謡二例の「かも」にしても、疑問語というよりは詠嘆、感動の意で用いられているというべきであり、果して疑問語と言えるものかどうかは甚だ問題であり、文意からしても感動の助詞と思えるものである。このような特色を伴う「らし」が、例え客観的な推量、確信的な推量と言っても、その機能を推量としていいものであるか。特に前掲の一八三八番歌の「此間散良思」は眼前にした実景であり、作者の推量などでは決し

であるまい。

今造る久述の都は山川の清けき見れば宇倍所うべし知良之すらし  
(六・一〇三七)

の例における「うべ(し)」は、「奈良朝に特有な物ぼめの表現」とも言われ、「うべ」は「なるほど」だ」と、「以下に述べることを当然と思ったり、他人の言説をもっともだとしてたりする場合に用いられる副詞」であるとも言われるものである。とすれば、そこに何故推量の意の入り込む余地があるのであろうか。

黒牛の海紅にほふ百敷の大宮人四朝入あさり為良霜すらし(七・  
二二八)

奈良山の峯ののみちば取れば散る時雨の雨師あま無な間零くふる  
良志らし(八・一五八五)

可志布江に鶴鳴き渡る志賀の浦に沖つ白浪多知たち之久良くら  
思毛しも(十五・二六五四)

織女おんな之船乗須良之ふなのりまそ鏡清き月夜に雲立ち渡る(十  
七・三九〇〇)

等の例における強意の助詞「し」との呼応においても同様である。「らし」が副詞「うべ(し)」と共に、強意の助詞「し」を受けていることの意味は大きいと言わねばなるまい。「なるほど」である。「ほかならぬ」である」という、強調的、断定的意味表現でなければ、これらの語をわざわざ

ざ用いる必然性はないと思われるからである。従来のように「〜であるらしい」と推量の意を加味すれば、表現意図は薄れ、歌一首の表現内容も深みのないものとなる。「らし」を推量の助動詞とすることは少しく無理があるように思われる。

天照大神、高木神、二柱神之命以、召建御雷神而詔、葦原中國者、伊多玖佐夜藝帝阿理那理。此十二字以音 我御子等、不平坐良志。此二字以音 (神武記)

も従来、推量と見て解釈されているが、これとて文意からして推量ではなく、断定的なことを「やみなやんでいる」と確信して、婉曲的、情意的に表現しているものと見なされるのである。

験なき物を思はずは一杯の濁れる酒を可飲有良師  
(三・三三八)

古の七の賢しき人たちも欲りせしものは酒西有良師  
(三・三四〇)

賢しみともの言ふよりは酒飲みて酔泣きするし益有良之  
(三・三四二)

言はむすべ為むすべ知らず極りて貴きものは酒西有良之  
(三・三四二)

世の中の遊びの道に楽しきは酔ひ泣きするに可有良師  
(三・三四七)

いわゆる推量の助動詞「らし」の本質について

は全て、「大宰帥大伴卿讚酒歌十三首」の中の用例である。その訓みは諸注釈書に依り少し違いはあるものの、「あるらし」の用例と見てよい例である。これらの例は全て、いわゆる推量の助動詞「らし」における「理由所知の関係も原因結果の関係」も共に存しないものである。「作者旅人の気持からいえば軽く断定していつているのであって、推測の度は決して重くない」と言われているように、と云うよりはむしろ、推量の意はなく「そうである」と断定的に言うことを婉曲的、情動的に言っていると見る方がより一首の意に即しているのではあるまいか。

## 二

我が旅は比左思久安良思この我が着る妹が衣の垢付く  
見れば (十五・三六六七)

の歌は、前稿でも取り挙げた例であり詳細は省略するが、その解釈は、例えば「自分たちの旅は久しくたつたらしい。この自分の着てある妹の下着の垢づいたのを見ると(澤瀉久孝『萬葉集注釋』)とされるものである。しかし、当時のこの歌の詠まれた事情を考えれば、とても「私の旅は久しくたつたらしい」等と言うものではなかったはずであり、作者が旅に出て相当数の日を経ていることは十分承知していることである。そこに推量の意の入り込む余地など少し

もなかつたはずである。自分が身に着けている妻の衣の垢の着き具合によつて、自分の旅の日数が経ってしまったことを「そうである」と述べているとしか考えられず、むしろ、「我が旅は久しくあり」の意と同じことを、心情的、婉曲的に、そして、文学的に表現したものと思われるのである。ところで、

武庫の海の尔波余久安良之漁する海人のつり舟波の上

ゆ見ゆ (十五・三六〇九)

蓮葉はかくこそあるもの意吉麻呂が家なるものは宇毛

乃葉尔有之 (十六・三八二六)

我が背子をこちこそ山と人は言へど君も来まさず山之

名尔有之 (七・一〇九七)

の例における「あらし」を全て「あり」と置き換えても、本質的な表現内容に何等差異は見られない。ただ、そこに言語主体者のそうあることに対する主観的な表現意図が看取されるだけである。

み吉野の吉野の宮は山からし貴有師河からし清有

師天地と長く久しく萬代に変わらずあらむいでましの宮

(三・三二五)

の例は、その反歌、

昔見し象の小河を今見ればいよいよ清けく成りにける

かも (三・三一六)

を挙げるまでもなく、吉野の宮は、その山そのもの故に貴くあるのであり、その河そのもの故に清けくあるのである。そこに推量の意等含めたら、歌の内容そのものが弱いものとなる。ましてここには、「山からし」「河からし」と、疑問、推量など不確定な要素の入り込む余地のない強調表現が使われているのである。同様のことは、例えば、

世の中の すべなきものは 年月は 流るるごとし

とり続き 追ひ来るものは 百種に せめ寄り来る

娘子らが 娘子さびすと 韓玉を 手本に巻かし 或

はこの句ありて云ふ、白妙の 袖振りかはし 紅の 赤裳裾引き

よち子らと 手携はりて 遊びけむ 時の盛りを 留

みかね 過しやりつれ 蜷の腸 か黒き髪に 何時の

間か 霜の降りけむ 紅の 一は云ふ、丹のほなす 面の

上に いづくゆか 雛が来りし 一は云ふ、常なりし 笑

まひ眉引き 咲く花の うつろひにけり 世の中は 可久乃未奈良之

大夫の 男さびすと 剣大刀 腰に取り佩き さつ弓

を 手握り持ちて 赤駒に 倭文鞍うち置き 匍ひ乗

りて 遊びあるきし 世の中や 常にありける 娘子

らが さ寝す板戸を 押し開き い辿り寄りて ま玉

手の 玉手さし交へ さ寝し夜の いくだもあらねば

手束杖 腰にたがねて か行けば 人にいとほえ か

く行けば 人に憎まえ 老よし男は 迦久能尾奈良志



たまきはる 命惜しけど せむすべもなし (五・八〇  
四)

に見られる「ならし」においても言えるであろう。一種の常套句とも言える。

世の中は如此耳奈良之 (三・四七八)

世の中は迦久乃尾奈良志 (五・八八六)

うつせみも如是能未奈良之 (十九・四一六〇)

の句は、「世の中といふものはかういふものであるらしい」などと  
言うものではなく、

世の中は常如此耳跡かつ知れど痛き心は忍びかねつも

(三・四七二)

等の例を見ても、「世の中というものはこういうものである」と断定的に言っているを見ると見るべきものであろう。つまり、断定の助動詞「なり」とその表現内容において、さしたる隔たりはないものと思えるのである。この様なあり—あらし、なり—ならしの関係は、次の例においても変ることとはないのである。

しかれこそ 神の御代より 宜しなへ 此の橘を 時

じくの 香の木の実と 名附家良之母 (十八・四一一

一)

み芳野の 蜻蛉の宮は 神からか 貴くあらむ 国か

らか 見が欲しからむ 山川を 清みさやけみ 諾し

いわゆる推量の助動詞「らし」の本質について

神代ゆ 定家良思母 (六・九〇七)

ここ見れば諾し神代ゆ波自米家良思母 (二十・四三六〇)

等の、一種の表現パターン化された例は、推量の意を含んでいるとは思われず、ここもまた、助動詞「けり」とその表現内容にそれ程の本質的な差異は認められないのである。「けり」はいわゆる過去・回想の助動詞である。過去の事実を納得せずに認めている、つまり、言語主体者の現在に関わって、過去の事実を認識、確認することを表現するものである。

三香の原久邇の京は荒去家利大宮人の遷ろひぬれば

(二八・一〇六〇)

潮待つと安里家流布祢乎知らずして悔しく妹を和可礼

伎尔家利 (十五・三五九四)

等の例からも明らかのように、「(今にして思へば)」であった「と表現するものである。「けらし」も先の用例が示す如く、「なるほど」であったなあ」と、現在の時点から過去の事実を確認して述べているのであり、そこに推量の意味を含ませるのは無理と言えよう。

萬世に語り継げとしこの岳に比例布利家良之松浦佐用

姫 (五・八七三)

ただ越のこの路にてしおし照るや難波の海と名附家良

思蒙(六・九七七)

天地のとも久しく言ひ継げとこの奇しみ魂志可志家

良斯母(五・八一四)

三香の原布当の野辺を清みこそ大宮どころ定異等霜

(六・一〇五二)

の例は全て、過去の言い伝え、過去の出来事を、今、この現在の時点から納得をもって確認していることは明白である。そして、

今朝のあさけ雁が音聞きつ春日山黄葉家良思吾が心痛

し(八・一五二二)

夕されば小倉の山に鳴く鹿は今夜は鳴かず寝宿家

良思母(八・一五二二)

うつくしと思篇来師な忘れと結びし紐の解くらく思へ

ば(十一・二五五八)

山守の里へ通ひし山道ぞ繁くなりける忘来下(七・

一二六一)

うちはなひ鼻をぞひつる剣刀身に副ふ妹し思来下

(十一・二六三七)

等の例も、根拠に基づき確信的推量などとしたのではその歌意は伝わらないであろう。例えば、「今朝の明け方雁の声を聞いた」その現実を心にとらえて、「春日山はもみぢしたことだなあ」と思いを至し、だから「私の心は痛むの

である」と思いを述べているのである。つまり、ここは実際自分が見、聞き、体験したことに基づき、今、現在の事実に思いを至しているのである。この様に考えてくると、「あらし」「ならし」「けらし」はそれぞれ、「あり」「なり」「けり」が形容詞化したものと考える方がその本質を示しているようである。

諾しこそ 見る人ごとに 語り継ぎ 思家良思吉

百代経て 思はえ行かむ 清き白浜(六・一〇六五)

の例があることから、「けらし」が形容詞型活用であることは明白であり、動詞「いそぐ」に対する「いそがし」、「行く―ゆかし」「やす―やさし」「なまめく―なまめかし」「ねがふ―ねがはし」「なつく―なつかし」等の多くの例から考えても首肯されることである。「あり」「けり」「なり」がそれぞれ「あらし」「けらし」「ならし」と形容詞化したと考えれば、その形容詞化したものが何故推量の意となるのであろうか。

「けらし」は(中略)「けり」の意に、主観的感情的

意義が加わったものらしく、必ずしも推量とすべきで

はないかもしれない。(岩波古典文学大系『伊勢物語』

補注)

と述べられていることは刮目してよく、物の存在、動作を表わす動詞的な「あり」「けり」「なり」に対して、「あら

し」「けらし」「ならし」は、物の性質、状態を表わしている形容詞的語と見なされ、先の万葉集一〇六五番歌の例から考えて、形容詞シク活用の型と判断できる。動詞から派生した形容詞は全てシク活用であり、シク活用の語には主観的な情緒の表現が多いと言われていることからも、「あり」「けり」「なり」がそれぞれ形容詞化したものが、「あらし」「けらし」「ならし」だと考えられるのである。勿論、「なり」は「にあり」が融合縮約して「なり」になったものであり、「あり」「けり」に対しては二次的な発生と言えよう。従来、「あらし」「けらし」「ならし」は、「あるらし」「けるらし」「なるらし」の「る」が脱落して成立したものの、省略形と考えられてきた。しかし、「あるらし」「けるらし」「なるらし」がそれぞれ「あらし」「けらし」「ならし」となる為には、例えば「あるめり」「あるなり」「あるべし」の「る」が撥音便化して、さらにそれが脱落し、「あめり」「あなり」「あべし」となるように、m・n・b音が次に来るといふ音韻環境があつてはじめて可能となることである。「あるめり」↓「あめり」「あるなり」↓「あなり」「あるべし」↓「あべし」「わらはべ」↓「わらべ」「かりな」↓「かな」等の例と同一視することは無理であろう。

この様に考えてくると、「らし」はどのように考えるべきものであろうか。先に述べた如く、その意味内容から考

いわゆる推量の助動詞「らし」の本質について

えて、推量の助動詞とはどうしても考えにくい。築島裕氏は、助動詞「つ」が、「棄つ」の「う」が脱落したものの、「ぬ」は「去ぬ」の「い」が、「べし」は「宜し」の「う」が脱落したものとのかえに立ち、これら「つ」「ぬ」「べし」と同じ成立過程を経て成立したものが「らし」であると考えられている。<sup>注12</sup>つまり、動詞「有り」に対応する形容詞「あらし」の「あ」が脱落して「らし」となったとされるのである。動詞終止形「す」に「あらし」が接し、「あ」が脱落したということである。それならば何故「あらし」と「らし」は築島氏が言われる「対等の別語」なのであろうか。先に挙げた用例でも明白なように、「あらし」「けらし」は用言の連用形に接続しており、「ならし」は体言又は用言の連体形に接続している。「あり」「けり」「なり」の接続と何等変わるところはないのである。然るに「らし」は終止形に接続している。終止した文を受ける「あらし」のみ「あ」を脱落させて終止形接続となったのであろうか。先にも述べたが、築島裕氏は「あらし」が動詞の終止形を受けて「す。あらし」のようになり、このような場合占くは母音が脱落することがあったとされ、助動詞「ぬ」「つ」「べし」の例を挙げておられる。しかし、「去ぬ」の「い」、「棄つ」の「う」が脱落するためには、脱落しうるべき音韻環境があつてはじめて成り立つのであつて、この

場合、単なる母音脱落現象とは考えられないのである。古くは「い・ぬ」「う・つ」それぞれ二語であったものが一語化するのと同時に、「ぬ」「つ」がそれぞれ造語成分化し、助動詞となつていったと考える方が、より自然な考えではないかと思われるのである。<sup>(注13)</sup> 現在五十語程度しかない一音節語が、ほんの一部の文献しか残存していない上代文献においては約一七〇語くらい見られるのである。古くはいかに多くの一音節語があつたかということも考慮されるべきであろう。「宜し」の「う」音脱落については、先に「抱く」について考えを述べたが、<sup>(注14)</sup> 同じような音脱落現象と考えられるのではないかと思つてゐる。築島氏の言われる「す。あらし」と、例えば「にはよくあらし（十五・三六〇九）」の「あらし」とはどう違うのであろうか。「らし」がこのようなかたちで成立したのであれば、本当に築島氏の言われる「対等の別語」と言うことができるのであろうか。

### 三

「らし」の成立に関しては、

「ら」は「らむ」の「ら」と同語であるに相違ないが、

……（中略）矢張、「有ら」の「ら」からであらう。

此を動詞的に用ゐたのが「らむ」で、形容詞的に用ゐ

たのが「らし」である。（松尾捨治郎『助動詞の研究』）とされ、吉田金彦氏も前掲論文において、<sup>(注15)</sup>

「らし」のらは後のラ変動詞「あり」などの基になつ

た存在詞「り」の未然形「ら」であり、「し」は後の

形容詞の語尾「し」と同じものであろう。

とされている。いずれにせよ「あり」の「り」がその成立に關わつてゐることは疑う余地はなく、事象・物事が存在していることを表わす動詞「り」が形容詞化して「らし」になつたと考える方が良いのではあるまいか。諸説はあるが、

大君の八重の組垣かかめども儼鳴阿摩之耳彌かかぬ組

垣（武烈紀・歌謡）

に見られる「あ」に「り」が接して一語化する以前に「り」が形容詞化したものであり、「あ」「り」が一語化した後に形容詞化したものが「あらし」と考えることも出来なくはなく、そう見なすのが最も矛盾が少いのではなからうか。

「けらし」も「やすけ」「またけ」「はしけ」等の「け」と同一機能を有した「け」に前述の「り」が接して一語化したのち、形容詞化したものと考えれば問題はないようである。<sup>(注16)</sup> 文献時代以前、「あり」と同じような意味で、存在を表わす動詞「り」が存在し、その「り」が形容詞化したものが「らし」であると考えては如何であらうか。

吾が故に妹嘆くらし風速の浦の沖辺に奇里多奈妣家利

(十五・三六一五)

海人乙女玉求むらし沖つ波恐き海に船出為利所見  
(六・一〇〇三)

新しき年の始めに豊の年しるすとならし雪能敷礼流波  
(十七・三九二五)

の歌における傍線部は、いわゆる完了の助動詞「り」の用例である。「り」は完了の助動詞と言われているが、その用例から見て、とても完了の意とすることは出来ず、動詞「有り」と同じ意味を有する助動詞と見る方が良いでしょう。つまり、先に述べた「あ有り」と同じく存在を表わす動詞「り」が助動詞化したものと見られるのである。このことは、

海人小舟帆かも張れると見るまでに輛の浦みに浪立有  
所見 (七・一一八二)

たらつねの母が飼ふ蚤の繭ごもり籠在妹見むよしも  
がも (十一・二四九五)

大伴の見津とは言はじ茜さす照有月夜尔直相在登母  
(四・五六五)

等の例が示す通り、「り」の表記に「有」「在」の字を用いている例が多く見られることから推測出来るのではあるまいか。

ところで、いわゆる完了の助動詞「り」は命令形承接の

いわゆる推量の助動詞「らし」の本質について

助動詞である。「り」が「あり」と同じ存在を表わす動詞から派生したものであれば、何故連用形承接ではないのであろうか。

	四段	上二段	上二段	下二段	サ変	カ変	ラ変	ナ変	
	行	見	過	求	為	来	有	往	
未然形	カ	ミ	ギ	メ	セ	コ	ラ	ナ	
連用形	キ	ミ	ギ	メ	シ	キ	リ	ニ	
終止形	ク	ミル	グ	ム	ス	ク	リ	ヌ	
連体形	ク	ミル	グル	ムル	スル	クル	ル	ヌル	
已然形	け	ミレ	グレ	ムレ	スレ	クレ	レ	ヌレ	
命令形	ケ	ミ	ギ	メ	セ	コ	レ	ネ	

(ひらがなは乙類であることを示す)

右の表でも明らかかなように、古くは連用形と命令形はその発生を同じくしていると言えよう。つまり、連用形と命令形は未分化であった蓋然性が高いと見なされるのである。例えば、カ行四段の連用形(甲類)・命令形(甲類)は、はしき(甲)・はしけ(甲)、過去回想の助動詞(甲)・け(甲)等の例が示すように、イ列甲類とエ列甲類の交替形であり、サ変・カ変の連用形は、「なせそ」「せし・せしか」、「なこそ」「こし・こしか」の例が示す通り、古くは「せ」「こ」であったと思われるのである。このように見てくると、古くは、命令形承接は連用形承接と

見ることにも出来るのである。<sup>(注17)</sup>

古い時代、「あり」と同じような意味で存在を表わす動詞「り」が存在し、それが助動詞化していったものが、いわゆる完了の助動詞「り」であると言えるのではなからうか。一方、「らし」は「り」の詞性がまだ強かった時、「あり」「けり」「なり」が「あらし」「けらし」「ならし」となったのと同じように形容詞化したものと考えられるのではなからうか。動詞は物の存在・動作を表わし、形容詞は物の性質・状態をあらわす語である。既述してきた如く「らし」に推量の意は見られず、そこには明らかに形容詞的性格が看取され、物の性質・状態を表わしていると見る方が適切と言える例がほとんどである。存在を表わす「り」が形容詞化したものが「らし」であると考えことは、それ程無理なことではあるまい。

形容詞は物の状態・性質を表わすものと見なされているが、その表現するところは心的状態と客観的性質との二通りの働きがあるように思われる。「清し」「赤し」「痛し」等のク活用の形容詞が、物の性質の客観的な表現であるのに対し、動詞から派生し、動詞に対応する形容詞は全てシク活用であり、心的状態を表わす情意表現である。「ゆく」に対する「ゆかし」は、そこへ行きたいような心の状態、つまり、見たい・聞きたい・知りたい等の心の状態を表現

しており、「痩す」に対する「やさし」は痩せるような思いがする心的状態からその意を派生し、いわゆる「やさしい」の意を表わしているのである。「急ぐ」に対する「いそがし」も、いそぎたいような思いがする心的状態を表現しているものと言えよう。このことは、つまり、例えば「思へり」は思っていることが存在することを意味し、「思ふらし」は思っているということが存在する心の状態を表わしているということである。

#### 四

やすみしし 我が大君の 朝には とり撫でたまひ  
夕には い寄り立たしし み執らしの 梓の弓の 中  
弭の 音すなり 朝獵に 今立須良思 夕獵に 今他  
田渚良之 み執らしの 梓の弓の 中弭の 音すなり

#### (一・三)

の例を挙げるまでもなく「らし」は終止形承接の助動詞である。既述してきた如く、「あり」「けり」「なり」がそれぞれ形容詞化したものが「あらし」「けらし」「ならし」であり、存在詞「り」が助動詞化したものがいわゆる完了の助動詞「り」であるとするれば、その承接は連用形(命令形)ということ、そこに何等問題は生じない。然るに、「り」が形容詞化したものが「らし」であるならば何故終止形を

承けているのであろうか。

飼飯の海の庭良くあらし苺り薦の乱れて出づ見ゆ海人のつり船(三・二五六)

天の海に月の船浮け桂梶かけて漕ぐ見ゆ月人壮士(十・二三三三)

鶯の音聞くなへに梅の花我家の園に咲きて散る見ゆ(五・八四二)

海人娘子玉求むらし沖つ波恐き海に船出せり見ゆ(六・一〇〇三)

さ夜中と夜はふけぬらし雁が音の聞ゆる空ゆ月渡る見ゆ(九・一七〇一)

春日野に煙立つ見ゆ娘子らし春野のうはぎ採みて煮らしも(十・一八七九)

等の例に見られる「見ゆ」は、上の文を完全に終結させた上でそれを受けている。奈良時代特有の表現形式のものと「言われているもの」である。例えば八四一番歌において、「鶯の聲を聞く折しも梅の花が吾が家の園に咲いて散るのが見える」<sup>(注14)</sup>、つまり、梅の花が我が家の園に咲いて散る。そのことが見えたと訳される、「見ゆる」の構文をもつものである。この「見ゆ」と同じ構文を有して成立したのが「らし」などの終止形承接の助動詞ではあるまいか。北原保雄氏は、「へなり」と「見ゆ」——上代の用例に見える

いわゆる推量の助動詞「らし」の本質について

いわゆる終止形承接の意味するもの——(國語學61輯)に

おいて、いわゆる伝聞推定の助動詞「なり」について、「見ゆ」との関連を述べておられる。「なり」と「見ゆ」の

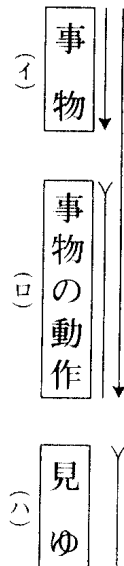
関連においては賛同するが、北原氏が提唱しておられる複述語文については、後述の如く賛同出来ない。ただ、「らし」も「なり」と同じ成立過程を経て成立しているのではないかと思われるので私見を述べたいと思う。北原氏は、

鶯の音聞くなへに梅の花我家の園に佐伎弓知流美由(五・八四二)

白妙の衣の袖を麻久良我よ安麻許伎久見由波立つなゆめ(十四・三四四九)

等のいはゆる「見ゆ留」の文において、その構文が一般的には、

とされているとし、その構文を否定して、「見ゆ留」の文には、



① 主格が必ずあること。

② 活用語の終止形で終る文節は無条件に文の要素にならないという国語文法の一般則との矛盾。

③ 見ゆ上接の(イ)と(ロ)との連文節は係助詞や副

助詞、あるいは格助詞などのついた例が全くないこと。

④ 事物（イ）に格助詞のついた例が皆無であること。

⑤ 事物（イ）に係助詞「は」のついた例があること。

⑥ (万・三・二五六) のような 事物の動作 見ゆ の構文の存在すること。

事物 の構文の存在すること。

を根拠に、複述語構文を提唱しておられる。しかし、このような「見ゆ」の上接文を、一つの準体句としてとらえることによる矛盾があるのではあるまいか。

要するに、古代の「見ゆ」は、上の文を完全に終結させた後で、それを受けているのであって、(佐竹昭広

「見ゆの世界」〈国語国文33巻9号〉)

とあるように、ここは準体句を形づくっているのではなく、文が一旦完全に切れており、「そのことが見える」という構文のものだと考えられるのである。従って、この終止形で終る文節が、決して文の要素になっていないのではないと言えよう。本来なら、終止形終止とは限らなくとも、構文上からは助詞が来てもおかしくはない。しかし、これは当時の一つの慣用的用法と見るべきもので、時代が下れば、藤波の佐伎由久見礼婆ほととぎす鳴くべき時に近づきにけり(十八・四〇四二)の如き例も生じさせる可能性は含んでいると言えよう。

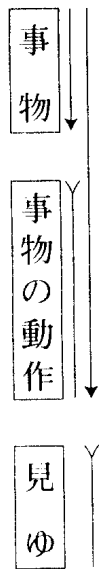
梅の花折りがざしつ諸人の遊ぶを見れば都しぞ思ふ

(五・八四三)

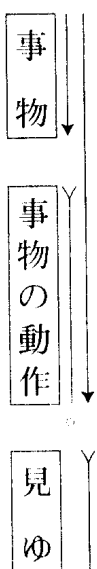
等の例における助詞は、何等問題とするには及ばないであろう。「見ゆ」と「見る」は自動詞的、他動詞的という違いのある語であり、他動詞的語「見る」の場合は、格助詞、係助詞が来ても少しも構わないのである。自動詞的、受身的な語がをという目的格を取ることではなく、助詞は動詞との関わりによってその取る助詞が違ってくるのである。

韓国の城の上に立たし大葉子は領布振らす見ゆ難波へ向きて(欽明紀・歌謡)

等に見られる係助詞は例は、逆に「見ゆ」の上で文が完全に切れており、又、連体句、準体句を形づくっているでもないことを示しているのである。係助詞はその付いた語を強調し、文末に影響を及ぼす助詞だからである。この「見ゆ留」の文で一番重要なのは、



なのではなく、



なのである。



そもそも文とは、言語主体者の判断行為である。話し手がある素材について解くこと、判断と判断行為を行うものが必要である。この素材、つまり提示がいわゆる主語であり、判断を下すものがいわゆる述語である。言語主体者によって行われた、主語及び述語を含む言語的表現が文なのである。言い換えれば、事物の提示と、提示されたものに対する言語主体者の判断がなければ文とは言えないのである。一つの文において、それが顕在しているか陰在しているかは別として、主語が存在しているのは当然であり、それに対する判断が二つあるわけはなく、一つの主語に対する二つの述語という言語行為は成立するはずはないと言えるよう。ここで見てきた「見ゆ」が、「終止形を承接しているのではなく、終止形である上位語は、その文を終止している」のだということは北原氏の述べられた通りであるが、それは、述語が二つあるということとは繋がらないであろう。

北原氏は、「見ゆ留」の文と同じ構文によって成立したのが、いわゆる伝聞推定の「なり」であるとされる。複述語文として成立したのが「なり」であるということについては既述してきた如く賛同出来ないが、「へなり」がある時期に動詞であった蓋然性はきわめて高い」ということは、肯綮に当る卓見であろうと思う。「な(音)」と「あり」と

の融合から「なり」が成立したとの考えには異論はあるものの、例えば、

ますらをの鞆の音すなりものふの大臣楯立つらしも  
(一・七六)

の例において、「鞆の音す」で文が終止し、その文全体を受けて、「そういう音がしている、それが聞こえてくる」と、二文構成で成立したものだと思われるのである。文献時代以前、「音」に「有り」と同じ存在を表わす動詞「り」がついて出来た「音り」があったと考え、推定することにより、終止形を承接している「なり」が説明出来ると言えるのではあるまいか。「音すなり」の表現において、「音す」を更に伝聞しているのではなく、音が聞こえてくるのではないのである。「音がしている」そのことが聞こえてくる、そういう音があるの意であり、「なり」はいわゆる伝聞推定などの意味でとらえるべき語ではないことだけは確かと言えよう。ただ、

大和には鳴きてか来らむ呼子鳥象の中山呼曾越奈流  
(二・七〇)

奈呉の海に潮のはや干ばあさりしに出でむと鶴は伊麻  
曾奈久奈流(十八・四〇三四)

梶の音曾髻髻為鳴海人娘子沖つ藻刈りに舟出すらしも  
(七・一一五二)

等の例における係助詞が明らかに「なり」に係っていることから、「なり」は既にその詞性を失くし、助動詞化していると言ふことができよう。

小夜更けて穿江水手鳴松浦船梶の音高し水尾早みかも  
(七・一一四三)

梶の音ぞ髣髴為鳴海人娘子沖つ藻刈りに舟出すらしも  
(七・一一五二)

我が背子にうら恋ひ居れば天の川夜船滂動梶の音聞こ  
ゆ (十・二〇一五)

等の例が見えることから、意味的には未だ詞性が少しは残っていたと考へうる証拠と言へるのではなからうか。

いわゆる断定の助動詞「なり」の表記に、多婢奈礼婆  
(十五・三六八六)、心空在 (十一・二五四一)、情空有  
(十二・二九五〇)等の例と共に、家尔阿利豆 (五・八八  
九)、比奈尔安流和礼乎 (十七・三九四九)、志贺尔安良七  
国 (三・二六三)の如く、「なり」の原形「にあり」の表  
記が見える。しかし、いわゆる伝聞推定の「なり」の表記  
は、前掲の例と共に、

奈加弭乃音為余利 (一・三)

呼曾越奈流 (一・七〇)

君来益奈利 (八・一五一八)

人曾離奈流 (四・六六〇)

奈岐弓伊奴奈流 (五・八二七)

等であり、「な・あり」の表記例は見られない。いわゆる  
伝聞推定の「なり」が「音十有<sup>あ</sup>り」から成つたのではなく、  
「音十<sup>な</sup>り」であつた可能性を示唆していると言へるのでは  
あるまいか。前述もしたが、もともと「あり」は「あ<sup>な</sup>り」  
であり、二語であつた蓋然性が高い。「あり」が一語化す  
るとそれが二音節語となり安定感に富み、動詞「有<sup>あ</sup>り」と  
して用いられ、「り」そのものは辞化していった、それが  
いわゆる完了の助動詞「り」であると考えられるのである。  
文献時代以前、同じ意味で詞として「り」と「あり」が二  
重形として用いられていた時期があつたであろうことは考へ  
うることである。「り」は一音節語ということもあつて独  
立性に欠け、次第に辞化していき、「り」を介して成立し  
た「なり」も詞性を失い、辞化していったと思へるのであ  
る。

古代日本語において、ラ行音、濁音が語頭に来ないこと  
は多くの先学が指摘されている通りであるが、文献時代以  
前の原始日本語においてはこの限りではないと思はれる節  
がなきにしもあらず、言語学者によっては語頭に濁音があ  
つた蓋然性を認めていられるのである。『古事記』によれ  
ば、

曾賀婆能 (雄略記)

### 曾能婆那能（雄略記）

の用例があり、訓みも傍訓の如くで誤っていないと思われ、諸注右の如く施訓している。しかし、婆は『古事記』では濁音バの仮名として用いられ、ハには波を用いるのが常套手段でさして誤ってはいない。とすると、右の例はソガバノ、ソノバナノと訓むべきものと思われ、『古事記』の音仮名文字の用法からして、それが自然な訓と見なされる。しかし、前田家本、猪熊本は波に作り、諸注それに従い傍訓の如く施訓しているのである。ところが一方、

### 芝賀婆能（仁徳記）

とあり、婆に写本の異同はなく、このままではシガバノと施訓するのが正に自然である。ウラバ、サクラバナ等の連濁であれば濁音も理解できるが、格助詞ノ、ガを介入させたの連濁は考えられない。従って、葉、花がバ、バナであった原始日本語が存在していた遺影と考える余地が全く否定されるとばかりは言えないのではなからうか。加えて、『古事記』においては濁音仮名ガとして用いられている賀が、

### 波都勢能賀波能（允恭記）

の如く、カハのカの表記に当てられている。格助詞ノが介入しているから連濁とは見なし難く、諸注傍線の通り施訓している。しかし、賀字は濁音仮名であり古写本一致して

異同はない。ハツセノガハノと訓むのが自然であろう。かかる事例は、

### 賀波能倍邇（仁徳記）

の如く、賀を清音カの仮名に用いたとおぼしきものもあるが、前田家本、猪熊本では邇に作り諸注カハノベニと訓んでいる。ところで

### 賀岐比久夜（仁徳記）

### 斗那賀能（仁徳記）

の場合は濁音仮名賀であろうともガとは訓み難く、カキヒクヤ、トナカノと施訓されている。岩波大系本は、古写本一致しているにも拘わらず加に作り、清音カと訓んでいる。同じく、

### 蘇良波由賀受（景行記）

### 賀美良比登母登（神武記）

の場合も、古写本一致している賀を清音カとして施訓されている。これらの事例は、古代日本語に重点を置くか、表記した仮名字母の用法に重点をおくかによって、訓も説も分かれるところであるが、『古事記』の文字用法からすれば、ガとするのが自然で相応しく、文献時代を遡る原始日本語においては、濁音が語頭に立った蓋然性は考えられなくもないようである。

ウラルアルタイ系の言語においては、語頭にラ行音が立

たないことは周知のことであり、日本語、韓国語においても例外ではあり得ない。最近でも、ロシアのことをわざわざオロシヤと言つて、語頭のラ行音を避けていたのである。韓国語においては、現在でもなおラ行音が語頭に立つことがなく、語頭にラ行音が来た場合は、例えば、「龍山（ヘヨンスン）」「利川（ヘイチョン）」「李（ヘイ）」の如く、ヤ行音にしたたり、[r]音を脱落させたりしており、あるいは「楞（ヘノン）」の如くナ行音に発音しているのである。「凌霄花」はノウゼンカズラのことであるが、『和名類聚抄』に、「陵苕本草云紫葳一名陵苕葳音威苕音條和名未加夜木一云農世宇蘇敬注云一名凌霄」とあり、正に語頭にラ行音を避けた例である。これは日本語の言語的性格によるものと考えてもよからう。『土左日記』において、「天気」をテムケ、テイケ、テケと表記した例が見られるのは、[n]音を持たない日本語において、その音を表記する文字はなく、ム表記、イ表記、無表記によつて[n]音を表記したのであり、漢語は漢字音に近い発音をすることが出来るようになっていたものと見ることが出来る。とすると、先の「凌霄花」は、もしかしたら、韓国経由で、韓国漢字音がそのまま将来されたとも考えられなくもない。

日本語においては、リ、ルは造語成分として、例えば、音ル（鳴ル）、音ス（鳴ス）、音ク（鳴ク）、音リ（ナリ）

の如く、ク、ス、ヌ、フ、ム、ユ等と共に有力な活用語尾の一つであることを勘案すれば、助動詞等にラ行音が語頭に見られるということは、活用語尾や助動詞のリ、ル、ク、ス、ヌ、フ、ム、ユ等は、もともと詞性を有した独立語であった可能性もあり、語頭にラ行音が立つ蓋然性を否定してしまうことも出来ないのではなからうか。ところで、漢字音における有気音、無気音の区別は、中国漢字音では、北京語、山東語、上海語、広東語、福建語、四川語等、どの方言においても、有気音は有気音であり、無気音は無気音である。越南漢字音においても、韓国漢字音においても例外ではない。<sup>(注20)</sup>ただ、日本漢字音だけが、有気音、無気音の区別を有しないのである。これは非常に刮目すべき事実であり、有気音、無気音を区別する下地が日本語に無かつたからではないかと考えられるのである。語頭にラ行音を取り入れなかつた韓国語において、有気音、無気音の区別を取り入れ得たのは、固有の韓国語において、有気音、無気音の区別を有していたからであろう。日本語には、それがなかつたためではあるまいか。日本漢字音においては、「力士儼<sup>りまじまひ</sup>（万・十六・三三三）」「禮<sup>れい</sup>樂<sup>らく</sup>等<sup>等</sup>（宣命・九詔）」「廬舍那（宣命・十二詔・十三詔・十五詔）」「餓鬼<sup>がき</sup>（万・四・六〇八）」「壇越<sup>だんをち</sup>（万・十六・三八四七）」「波羅門<sup>はらもん</sup>（万・十六・三三五六）」等、ラ行音、濁音を

そのまま取り入れた例が見られる。とすると、ラ行音も語頭に立ち得る下地があったのではないかと推察され、存在詞「り」の存在も有り得ないことではあるまい。

## 五

いわゆる推量の助動詞「らし」の成立は、既述してきた、いわゆる伝聞推定の助動詞「なり」の成立と同じくして、いと考える方が矛盾抵触なく説明出来ると言えよう。

古昔も 然にあれこそ うつせみも 妻を 相格良思  
吉(一・一三)

諾しこそ 見る人ごとに 語り継ぎ 惣家良思吉 百  
代経て 惣はえ行かむ 清き白浜(六・一〇六五)

等の用例が見られることから、明らかに形容詞シク活用の語であることは否めない。「なり」と同様、文献時代以前、存在を表わす動詞「り」が形容詞化して成立したのが「らし」だと考えるのである。そして、「見ゆ」が上の終止した文全体を受けて、そのことが見られる、そういう状態が見えると表現したように、「らし」も「そのようにある」「そのような状態である」と言っていると考えられるのである。動詞に対応する形容詞は全てシク活用であり、心の状態を表わす情意表現であることも考え合わせると、そのような状態だということを言語主体者が、「うだなあ」「う

であるよ」と情意的、婉曲的、断定的に表現したものとらえることが出来るのではあるまいか。文献時代以前は「見ゆ」と同じく詞性を有していたと考え得る「らし」は、その用例全てが示している通り、文献時代においてはその詞性を失くし、終止形接続の助動詞として辞化して生き残ったものと考えられるのである。そう考えてはじめて終止形接続である理由も説明出来るし、また、既述してきた如く「らし」が推量の意を有していないことも説明出来ると言うものである。加えて、後述する如く、「らし」の連体形と見なされてきた『万葉集』一五九、四五一〇番歌の例も、終止形の連体用法にすぎず、従来のように連体形にラシとラシキの二型を考える必要はなく、ラシの語形は全て終止形と見なすことができるのである。連体形ラシキの例も合せて、「らし」は全て文末の用例しか見られないということは、「らし」が「見ゆ」と同じ構文をなして存在していたことの名残りと言うことも出来よう。他の終止形接続の助動詞のように、その働きの幅を広げることもなく、上代特有の表現形式のまま辞化していったと言うことが出来るかもしれない。

春日野に煙立つ見ゆ娘子らし春野のうはぎ採而煮良思  
文(十・一八七九)

我が妻は伊多古非良之飲む水に影さへ見えてよに忘

られず(二十・四三三二)

の例は、「らし」が連用形を承接している例である。これは「見ベシ」「見ラム」「見トモ」等とともに、終止形接続の助詞、助動詞が上一段活用に限って連用形に承接している古いかたちの残存例と言えるのではなからうか。文献時代以前には他の活用形においても連用形に承接していた、つまり、連用形が全ての活用形を荷っていた遺影と言えるのではなからうか。ところで、

武庫の海の尔波余久安良之漁する海人の釣り船波の上

ゆ見ゆ(十五・三六〇九)

我が旅は比左思久安良思この我が着る妹が衣の垢着く

見れば(十五・三六六七)

などの例と共に、

玉に貫く花橘を乏しみし此の我が里に伎奈可受安流良

之(十七・三九八四)

み雪降る冬は今日のみ鶯の鳴かむ春辺は安須尔之安流

良之(二十・四四八八)

の如き例が存在することにより、「あらし」は「あるらし」の省略形と考えられてきたのであるが、築島裕氏も述べられている如く、「あるらし」の「あ」が何故脱落したのかの根拠はなく、脱落しうる音韻環境でもない。また、既述してきた如く、「あらし」は「あり」が形容詞化して出来たもの

であり、「らし」とはその発生を同じくしてはいない。思

うに、「あるらし」は「らし」が完全に辞化した後、活用語の終止形(ラ変には連体形)に接続していることの類推によって成立したものと考えられるのである。従って、前掲の如き「あるらし」の例はあくまでも動詞「有り」に「らし」が接続したものであり、「有る」ということが存在することを断定的に、しかし、情意的、婉曲的に述べているのである。つまり、あるという状態がより強調された心情的表現なのである。先に挙げた旅人の讃酒歌の例は完全な仮名書きの例ではないが、五例とも全て「あるらし」と訓むべきもので、そう訓んではじめて、「中央政府から遠ざかった孤愁の感情」「着任後間もなく最愛の妻大伴郎女を喪つて、仏教の世間虚仮の思想をもつてしては救われぬ、詩人的憂悶に閉ざされている」と言われる旅人の主観的、内面的世界が理解できると言うものである。また、このよ

うな例は、『続日本紀宣命』においても言えることである。

然て、皇と坐して天の下治め給ふ君は賢しき人のよき

臣を得てし天の下をば平けく安らけく治むるものに

在良之止聞余母こしめす。(二十四詔)

等と見られる例は、「在良思」「在良之」「有良志」など全て完全なる仮名書きの例ではないが、アラシと訓んだのではその意を尽くしているとは言い難く、「しである」というこ

とを明確に、しかし婉曲的に述べているととるべきであろう。『宣命』に関しては、本稿では特別に取り挙げることはしなかったが、

此波 朕劣尔 依母 加久言止良之 念召波 (二十七詔)

の例を挙げるまでもなく、「らし」が明らかに推量ではないことを示していると言える。「かく言ふ」は明らかかな事実を表現しており、「そのように言う」ことを婉曲的に「そうだ」と言っているのである。

「あるらし」とその発生を同じくしていると思われる「なるらし」は、奈良時代にはその確例が見られず、平安時代になって、

春をおしむうぐひすのねもきてなかつ野は又花ぞさかりなるらし (宇津保・きくの宴)

水底の月の上より漕ぐ舟の棹にさはるは桂なるらし (土左日記)

の如き例が見えはじめることから、また、「けるらし」に至っては管見に入る限りその確例さえ見られないことから、「あるらし」「けるらし」「なるらし」から「あらし」「けらし」「ならし」が発生したものでないことは明らかであろう。

うちなびく春立はるたち 奴良志吾ぬらし が門の柳の末に鶯鳴きつ (十・一八一九)

いわゆる推量の助動詞「らし」の本質について

今よりは安伎豆吉あきづきぬらし 奴良之足引の山まつかげにひぐらし鳴きぬ (十五・三六五五)

ぬば玉の欲波安氣よはあけぬらし 奴良之多麻の浦に漁りする鶴鳴き渡るなり (十五・三五九八)

印南野は往過ゆきすぎ 奴良之天伝ふひかさの浦に波立てり見ゆ (七・一一七八)

の例は、いわゆる完了の助動詞「ぬ」に「らし」がついた例である。いわゆる完了の助動詞「つ」「ぬ」の違いについては、これまで種々論じられて来たが、未だ明確な定説はない。ところが、この「らし」の接続に関しては明らかでないを見せているのである。前掲の如き「ぬらし」の例は数多く見られるのに、「つらし」の例は全く見られないのである。時代が下って、

しらくものこのかたにしもおりゐるは天つ風こそ吹きて来つらし (大和物語・一三二段)

の如き例が見られはするが、これも、

しら雲のこのかたにしもおりゐるはあまつ風こそふきてきぬらし (大鏡・昔物語)

と、同歌異伝と見られる例があり、「つらし」の確例とするには問題があるのである。既述してきた如く「らし」は存在を表わす「り」が形容詞化したものであり、言語主体者の今、現在に関わっている語であるとすれば、「つらし」

の例が見られないということは、「つ」の本質に関わることであり、そこに「つ」「ぬ」の意味機能の差が看取されるときも言えよう。詳細は別稿に譲るが、「つらし」「ぬらし」の問題は、「つ」「ぬ」の違いを知る上で重大な意味を持つのではないかと考えている。勿論、「つらし」の例が無いのと同様、「たるらし」の例が見られないのもまた然りである。

賢しきと物言うよりは酒飲みて酔ひ泣きするし益有良

之(三・三四一)

の第五句に対し、マサリタルラシと施訓している注釈書がかなり見られるが、「たるらし」の語は存在し得ないと考えられる故、桜楓社本『萬葉集』の如くマサリテアルラシと施訓すべきものと考えている。「あるらし」「なるらし」の例は、時代的遅速はあっても、相当数見出されるのに対し、「たるらし」と同様「けるらし」の確例は管見に入る限り見られない。いわゆる完了の助動詞「ケリ」は、既になされた事柄に対して、今、現在の時点から「そうだった」と確認する意味を持つ、つまり、言語主体者の今、現在における認識、確認の意味を表現する助動詞である。「ありけり」「なりけり」の例、口語訳すれば「今にして思えばなる程」であったなあ」の表現はあり得ても、前述した「らし」の意味機能を考慮すると、「けるらし」の存在する

はずはないのである。「けり」にわざわざ現在そうあることを述べる「らし」をつける必然性は何等存在しないのである。逆に言えば、「けるらし」の無いことが既述してきた如く、「らし」は存在を表わす動詞「り」が形容詞化して出来たものであり、言語主体者の今に関わって、「」であるなあ」「」である状態だ」と情意的、婉曲的、断定的に述べる意味機能を有する語であることの一つの証しともなる。いわゆる完了の助動詞「つ」は過去完了を表わし、「ぬ」は現在完了を表わす意味機能をもっていると考えている。過去に既に完了してしまった事を表わす「つ」に、現在そこに存在する事を表わす「らし」が見つからないのは当然なことで、「けるらし」が存在しないことと同様、何の不思議もないのである。「つ」より派生した「たり」に「らし」が見つからないのも同様な理由によるものと考えている。過去、回想、完了等と言われている助動詞については、もっと明確にその違いを明らかにすべきであるが、それは別稿に譲りたいと思う。

「らし」が疑問語「や」「か」「何」などと共に用いられる事がないのも、仮定条件を受けることがなく、全て確定条件の下に用いられる事も、既述してきたことからして至極当然なことである。「らし」は存在を表わす「有り」と同じ意味を有する「り」が形容詞化して成立したものであ



り、常に、言語主体者の今、現在における事柄を、断定的、情意的、婉曲的に表現する意味機能を有する語だからである。

## 六

八田の野の浅茅色付く有乳山峰の沫雪寒零良之  
(十・二三三二)

勢能山に黄葉常敷く神岡の山の黄葉は今日散濫けふかららむ (九・

一六七六)

等の例における「らし」と「らむ」について中西宇一氏は、「らし」は根拠のある確信的な推量を表わし、「らむ」は確実性のない疑惑的な推量、一般的推量を表わすと、その違いを述べておられる。何故一般的推量、確信的推量と述べられているか、ある程度理解は出来る。しかし、それは「らむ」のむによる推量性、「らし」の推量性のなさから来る違いであることは明らかであろう。いわゆる現在推量の助動詞「らむ」については、別稿で詳細に述べたいと思っているが、その成立は「らし」の成立と深く関わっていると考えている。「らし」が存在詞「り」の形容詞化したものに対し「らむ」は存在詞「り」に推量の助動詞「む」がついたものであり、従って、そこに推量の意味が含まれていることは当然であり、言語主体者の今、現在における推

いわゆる推量の助動詞「らし」の本質について

量であることも当然のことである。前掲の歌は、「八田の野の浅茅が色づいている。有乳山の峰には沫雪が寒く降っているなあ」、「勢能山に黄葉が散り敷いている。神岡の山の黄葉は今日もう散っているだろうか」とでも訳すべきもので、そこには明確に推量の意の有無が区別されるべきであろう。つまり、「らし」は現在雪が降っているのを生体体験から実際に知っており、その事実を情意的、婉曲的に表現しているのである。一方、「らむ」は実際には見えない事実、事柄を、今、現在の時点で推量しているのである。時代が下り、『古今集』等において専ら「らむ」にその機能を委ねてしまう等と言われているが、それは『古今集』等と『万葉集』との表現内容の違いによってなされたことであり、つまり、観念の上での想像を平安人はより好んだため「らむ」が多用されたのであり、「らし」「らむ」の語そのものの意味機能の重なりによってではあるまい。

霧立ちて雁ぞ鳴くなる片岡の朝の原はもみぢしぬらむ  
(古今集・二二五二)

今朝の朝明雁が音聞きつ春日山黄葉家良思我が心痛し  
(万葉集・八・一五二三)

の例を見てもその違いは明白であろう。『古今集』の例は、「霧が立って雁が鳴いているのが聞こえているよ。片岡の朝の原は今頃はもう黄葉しているでしょうか」と、今、現

在の様子を推量しており、『万葉集』は、「今朝の朝明雁が音を聞きました。春日山はもう色づいてしまっているなあ。私の心は痛む思いです」と、心情的に黄葉している事実を述べているのである。雁が鳴く頃になると山は黄葉するものであることは、当時の人々の生活体験として当然のこととして把握され、認識されている現実である。その現実をふまえて『古今集』の方は「朝の原が黄葉してしまったであらうなあ」と想像しているのに対し、『万葉集』の方は「春日山はもう黄葉してしまったなあ」と、黄葉している状態であることを情意的、婉曲的に述べているのである。例えば、

わが門の浅茅色づく吉隠の浪柴の野の黄葉散良新  
(十・二一九〇)

における「らし」を「らむ」と置き換えれば、「吉隠の浪柴の野の黄葉は散っているなあ」の意が、「吉隠の浪柴の野の黄葉は今頃はもう散っているだろうなあ」と推量になるのであり、「らし」と「らむ」の間には明確な意味上の違いがあると言わねばなるまい。

ところで、この二一九〇番歌は、

我がやどの浅茅色づく吉隠の夏身の上に四具礼零疑  
(十・二二〇七)

の歌と、その表現内容においてほとんど同じものである。

従って、従来第五句の疑字に対しラシと施訓し、シグレフルラシと訓み、ほぼ定説化している。しかし、疑字をいわゆる推量の助動詞「らし」の表記に当てることは、万葉集中における疑字の文字用法からは勿論、既述してきたことからしても極めて異様であり納得し難いことである。疑字に対しては同じ巻十に四例、

渡し守船渡せをと呼ぶ声の不<sup>いた</sup>至者疑<sup>ねば</sup>楫の音のせぬ  
(十・二〇七二)

おし照る難波堀江の葦<sup>かり</sup>宿有疑霜<sup>ねたるかも</sup>の降らくに  
(十・二二三五)

の如く、カモと施訓されている例が見られる。しかし、カモと施訓することには歌意の上からも抵抗がある。同じ疑字に対し、

十月時雨の雨に濡れつつか君之行疑<sup>きみはゆく</sup>宿可借疑<sup>くらむ</sup>  
(三二二二)

と、一首に二例だけ現在推量の助動詞「らむ」が当てられていることを加味すれば、疑字は義訓的の文字用法と見なしシグレフルラムと施訓すべきであろう。同じく、

明日香川もみち葉流る葛城の山の木の葉は今之落疑  
(十・二二二〇)

の第五句もイマシチルラシと訓まれているが、

桜花時は過ぎねど見る人の恋の盛りと今之将<sup>いまは</sup>落<sup>ちる</sup>

(十・一八五五)

春の花伊麻波さかりに仁保布良牟折りてかざさむ手力  
もがも(十七・三九六五)

の例を参看すれば、イマハチルラムと訓むべきであり、<sup>注26</sup>そうしてはじめて疑字を用いた意味も理解できるといふものである。これらの疑字に対しては、岩波古典文学大系や、吉田金彦氏は、ラシではなくラムと訓むべきであるとされている。しかし、ラムと訓むべき第一の理由は、「らし」に推量の意はなく、疑字の意に添わない故である。二一九〇番歌と二二〇七番歌は、その表現形式はほぼ同一であるうとも、そこに表現内容の違いは明確に存在すると言ふべきである。吉田金彦氏は前掲論文において、<sup>注27</sup>この二二〇七番歌の他、

いざ子ども早く大和へ大伴の御津の浜松待戀奴良武  
(一・六六三)

ぬば玉の夜明かしも船は漕ぎ行かな御津の浜松麻知故  
非奴良武(十五・三七二二)

久方の天の露霜置きにけり家なる人も待戀奴濫(四・  
六五一)

塩干の三津の海女のくぐつ待ち玉藻将<sup>らむ</sup>苜いざ行きて  
見む(三・二九三)

の例は、何れも「らし」に置き換えても何の不都合も起ら

いわゆる推量の助動詞「らし」の本質について

ない「らむ」であるとされる。しかし、六三番歌、三七二  
一番歌はその題詞により、「今ごろは<sup>らむ</sup>であろう」と推量  
して訓んでいるのに相違することなく、決して「らし」に  
置き換えることの出来るものではない。六五一番歌もその  
前後の歌の関係から「自分が他郷に年月を過して家に残し  
た人を戀しく思ふにつけ、家なる人と思ひやる心である  
(注釋)」とあるように、今、現在の家なる人のことを推量  
したものと思われる。従って、とても「らし」に置き換え  
ることなど出来るものではない。また、二九三番歌は「ら  
む」を「らし」に置き換えることは出来よう。しかし、そ  
うすることでの表現内容は現在推量の意から断定的、情  
意的、婉曲表現となり、「玉藻を苜っているなあ」の意と  
なるのである。

筆者は前稿において、「らし」は時代が下るにつれ意味  
の移行が行われ、明らかに推量の意味を持つようになって  
くると述べたが、平安末期、鎌倉時代頃になると、その使  
用例に若干の違例は認められるものの、その本質的意味機  
能が変化したとは認められないのである。「らし」と「ら  
む」はあくまでも別語であり、本質的意味機能は明確に区  
別されるべきものである。既述してきた如く、「らし」は存  
在詞「り」が形容詞化して成立したものであり、「らむ」  
はその「り」に推量の助動詞「む」が接して成立したもの

と考えられる。「らむ」の成立に関しては、「有り」に「む」が接して成立したとする考えが多いが、「あり+む」は「あらむ」であり、

しまらくは祢都追母安良牟乎夢のみにもとな見えつつ  
我をねし泣くる（十四・三四七二）  
咲けりとも知らずしあらば母太毛安良牟この山吹を見  
せつつもとな（十七・三九七六）

の例でも明らかな如く未来推量を表わしている。この「あらむ」の「あ」が脱落したとはとても考えられないことである。「らむ」はあくまでも現在推量を表わしており、「らし」と同様の成立過程を経たと考える方が妥当であろう。「らし」と「らむ」は共に存在詞「り」が関わっている以上、主語主体者の今、現在に関わつての表現であることは当然であるが、そこに意味の重なりを求めることは少しく無理があるのであり、「らむ」は「らし」に置き換えることは出来ないのである。

## 七

### 天皇崩之時太后御作歌一首

やすみしし 我ご大君の 夕されば 召賜良之 明  
けくれば 問賜良志 神岡の 山の黄葉を 今日も  
かも 問給麻思 明日もかも 召賜萬旨 その山を

ふりさけ見つつ 夕されば あやに悲しみ 明けくれ  
ば うらさび暮し 荒妙の 衣の袖は 乾る時もなし  
（二一・一五九）

に於ける「召賜良之」「問賜良志」の「らし」は、下の体言「神岡」を修飾する連体形であり、「天皇の御靈が生前愛で給うたまゝに今日もおたづねになり御覧になつてゐるらしい（注釋）」という意味で推量の助動詞を用いたと見るべきだとされ、また、「ここは連体形。神岡にかかる。すでに天皇は崩ぜられたが、確実に朝夕御覧になるような氣持のすることをラシで表現している。（岩波古典文学大系）」とされてきたものであるが、既述してきた如く、「らし」は推量の意味を有してはおらず、その用例も全て文末にあり、下の語に係る例は見られない。<sup>〔注28〕</sup>この歌は題詞が言うように「天皇、崩りました時、太后作らす歌」であることを考え合せると、終止形の連体用法とみなし、太后が感懐を持って「やすみしし我が大君は、夕方になるとご覧になるのであるよ。夜が明けるとお尋ねになるのであるよ。その神岡の山の黄葉を今日もまあ、お尋ねになることでありましょう。明日もまあご覧になることでありましょう。その山を振り仰ぎながら、夕方になると無性に悲しみ、明け方になると心寂しく時を過ごし、荒妙の衣の袖は悲しみの涙で乾く時ありません」と、情意的、感動的に詠んだ

ものと解すべきであると思われる。「大君の…召賜良之」と、の助詞を取って「らし」で文が切れる詠嘆の表現と言えよう。また、「問賜麻思」「召賜萬旨」の「まし」は反実仮想の助動詞と言われているが、存在詞「り」が形容詞化したものが「らし」であるのと同様、推量の助動詞「む」が形容詞化したものであり、未だ事実が存在していないことを、そのようだ、そのような状態だと心情的婉曲的に言っている助動詞だと思われる。反実仮想という意味は、あくまでも文に帰納してその様な意味を帯びてくるのである、「まし」そのものの本質は、推量の助動詞「む」が形容詞的な働きをするところにあると考えるべきであろうと思われる。従って、形容詞は時制とは関係なく、そのような状態、性質であるということを表現する語であるからして、「夕されば―明けくれば」「今日もかも―明日もかも」と対句的に、「らし」「まし」でその心的有り様、状態を心情的婉曲的に表現したものとする方が、歌一首の意にかなっているようである。このように考えてくると、従来連体形とされてきたこの「らし」は終止形の連体用法として、感動を表わしたものと見なして一向差し支えない。同様に、大君の都藝弓賣須良之高田の野辺見る毎に音のみし泣かゆ（二十・四五一〇）

における「らし」も、「大君が今も引き続きご覧になつて

いわゆる推量の助動詞「らし」の本質について

いるなあ。そのような思いがする高田の野辺を見るたびに、自然と声に出して泣かれてくる」と、既に亡くなられた天皇を偲んで、感懐を持って心情的に詠んだものと解すべきものであり、やはり、終止形の連体用法と見るべきものである。従って、「都藝弓賣須良之は、繼て御覧給へりし、云意にて過去し方のことをいへる詞なり。（古義）」等と過去の問題として解釈する必然性も無いと言えよう。この様に考えてくると、

いにしへも然にあれこそうつせみも妻を相格良思吉  
（一・一二）

諾しかも蘇我の子らを大君の菟伽破須羅志枳（推古  
紀・歌謡）

の例に見られる連体形ラシキの他に、連体形ラシを認める必然的理由、根拠はない。従来「らし」の連体形にラシキとラシの二型を設けているが、ラシの型が連体形と見なされる例は、前述の如く終止形の連体用法にすぎず、連体形とすべきではあるまい。

諾し己曾 我が大君は 君ながら 聞かしたまひて  
さすたけの 大宮こと 定異等霜（六・一〇五〇）  
しかれ許曾 神の御代より 宜しなへ 此の橋を 時  
じくの 香の木の実と 名附家良之母（十八・四二二）

の例において「こそ」の結びに終止形ケラシが用いられて

いることから考えても、「らし」はその形を変化させることなく、終止形の形でその全てをまかっていたものと思われてくる。と言うより、「らし」は全て文末用法しか存在し得ず、そこに「らし」が他の活用形を派生させ得なかつた理由を見るべきなのかもしれない。奈良時代において見られる連体形ラシキの例は平安時代以後その例を見ない。一旦発達しかけた活用形が消滅したと考えることも出来るが、あるいは位相差によるものかもしれない。『万葉集』『日本書紀』にラシキの形が見られると言うことは、その当時の都の知識人の言語であった可能性は高く、一般ではラシキと共にラシが平行して用いられていたのかもしれない。大和から山城に都が移り言語の荷い手が変わったことにより、日常語であったラシが表の世界へ出て、ラシキが使われなくなったと考えることも可能性としてはあり得ることである。一旦発達しかけた活用形が消滅するということは、何か必然的理由があればこそ首肯できることであり、何等必然的理由もなくして急になくなるはずはないと思われるからである。(注2)

## 八

いわゆる推量の助動詞「らし」は、ある事実を根拠にして、確信を持って推量するのを基本的意味機能として持つ

助動詞だと言われ、ほぼ定説化している。「らし」は確定条件の下に用いられることはあっても仮定条件の下に用いられることはなく、疑問語と共に用いられることもない。これらの特色から考えると、確信的推量と考えられてきたことは、ある意味では当然のことと納得出来ることでもある。しかし、これまで述べて来た如く、奈良時代における種々の用例に照らして、「らし」に推量の意を持たせることには少しく無理がある。推量しているとされてきた事柄は、当時の人々にとって生活体験上極めて当然のことであり、確信的、疑問の余地のないことばかりである。また、「らし」の成立に関しても「あるらし」の「る」が脱落して「あらし」となり「あ」が脱落して「らし」となったと言われているが、「あらし」と「らし」はその発生を同じくはしていない。「あらし」「けらし」「ならし」はそれぞれ「あり」「けり」「なり」が形容詞化したものであり、その意味機能も「あり」「けり」「なり」に通ずるものがある。一方「らし」は、文献時代以前存在していたと推定し得る、「有り」と同じ意味機能を有する存在詞「り」が形容詞化し、辞化していったものであり、その意味は「そうである」ことを断定的に、しかし心情的婉曲的に「〜であるなあ」と表現したものである。動詞から派生した形容詞はシク活用であり、そのような思いのする心の状態を表現する

情意表現の語であることから首肯出来ることである。「らし」は終止形承接の助動詞である。同じ成立過程を経たと思われる「あらし」「けらし」「ならし」がそれぞれ「あり」「けり」「なり」と同じ承接関係をなしているのに対し、「らし」だけは何故終止形に承接するのであろうか。奈良時代特有の表現形式、いわゆる「見ゆ留」の構文にその源を求めることが出来るのではなからうか。終止形承接の助動詞は全て、いわゆる推量の助動詞と言われ、ほぼ定説化しているが、その本質的意味機能を考えた場合、果してそうであるのか疑問が残る。活用語の終止形はそこで文が終結しており、陳述は既に終了しているはずである。推量や完了等というものは、その語が無ければ文は完結しないのであって、この「らし」の場合は、提示されたこと(主語)に対する言語主体者の判断(述語)は既に済んでしまっているところに付いているのである。それを推量の意とするのは疑問が残るのである。

海人娘子玉求むらし沖つ波恐き海に船出せり見ゆ  
(六・一〇〇三)

等の、いわゆる「見ゆ留」の文は、「見ゆ」の上の文が完全に終結しており、その終結した文全体を受けて「そのことが見られる」と表現するものである。ここで見て来た「らし」も同じ成立過程を経ているのではないかと思われ

るのである。つまり、「らし」はその上の文全体を受けて「そういう状態である」「そういうことだなあ」と婉曲的、心情的に断定して述べていると見るのである。ただ「見ゆ」と違って、文献時代には既にその詞性を消失して辞化しており、終止形承接の助動詞の如くして存在していると考えるのである。従ってそこには推量の意があるはずはなく、ただ、婉曲的、情意的断定表現であるが故、現代語訳すれば推量の意ともとられるようなことにもなり得る可能性は有していたと言えよう。

「らし」は現在推量の助動詞「らむ」との対比から、その意味機能の違い、重なりを論じられてきている。「らし」と「らむ」の成立過程はほぼ同じと考えているが、「らし」は存在詞「り」が形容詞化したものであり、「らむ」は存在詞「り」に推量の助動詞「む」がついて成立した語であろう。推量の助動詞「む」が関わって成立している以上、「らむ」に推量の意が存在するのは当然で、「らし」とその意味機能を同じくすることはあり得ないであろう。時代的に「らし」と「らむ」の用例に多寡はあるが、それはその文献等資料の表現内容の違いによるのであり、言語の荷い手の好みの違いによるものである。決して、意味、内容の重なりによってではないと思われる。詳細は別稿に譲るが、時代が下ってもそれぞれの本質的意味機能が大きく変化す

ることは無かったと考えている。

ちはやぶる神世にはうたのもじもさだまらずすなほにして事の心わきがたかりけらし（今古集・序）

いにしへもいまのものなさけある心ばせをばゆくすゑにもつたへむことをおもひてえらべるならし（後拾遺集・序）

等と見られる「けらし」「ならし」の例は、各時代を通してその用例を見ることが出来る。この「けらし」「ならし」はそれぞれ「けり」「なり」と置き換えても差支えないところであり、ただ、婉曲的に表現しただけであると思なされる。勿論、既述してきた如く推量の意は有していない。

神明の加護かならず恙なかるべしと云捨て出つつ、哀さしばらくやまざりけらし（奥の細道）

等の如く、近世期に数多く見られる「けらし」も、近世期に新たに出来た近世特有の語などではなく、

衣うつ聲蟲の音もよそよりは早き心地するは、夜寒の里も近ければならし（鶉衣）

の如き「ならし」の例と共に、その意味を変化させることなく、上代から残存し続けてきた語であると言えるようである。

上代語特有語とも言われる「らし」、そして「あらし」「けらし」「ならし」は、平安時代にもその例が数多く見ら

れるとは言えないものの、「へらし系語」は、三代集に多く、後拾遺集以後は、顕著に減じ、新古今集で盛り返している<sup>〔注30〕</sup>とある如く、その姿を消滅させることはなかったのである。おそらく、多くは日常語として底流に生き続け、鎌倉時代に至り、言語の荷い手の変化により表の世界に出てきたものと言えるのではあるまいか。文献に姿を留める言語はほんの一部であり、まして、時の政治、文化の荷い手によって片寄りがある。特に日常語は文献に姿を留める事は少く、その用例が見られないからと言って、簡単に、その言葉が無かったとは言えない。ここで取り挙げた「らし」もその例外ではあるまい。特に近世期に多く用いられている「けらし」なども、その流れに添って考えるべきものであるろう。現代口語における、例えば、「男であるらしい」「女であるらしい」等も、決して別語ではなく例外ではないと考えている。「男であるらしい」「女であるらしい」は、一見推量表現ともとれるが、実際は「男であること」「女であること」を確信を持って婉曲的に表現しているだけであると思えるからである。そして、「男らしい」「女らしい」の語も、「らし」との関わりによって考えるべきものと思っている。

「らし」はいわゆる推量の助動詞などではなく、言語主体者の今、現在に関わっての、実際に体験、経験したこと



に對する「そうであること」の断定的、心情的、情意表現をなす語と言ふべきである。そして、それは各時代を通して、その本質を大きく変えることは無かつたと言えるのではあるまいか。

注1 松尾捨治郎『助動詞の研究』

注2 拙稿「いわゆる推量の助動詞「らし」の考察―万葉集を中心として―」（香椎潟第32号）

注3 時枝誠記『國語學原論』参照。

注4 吉田金彦『上代語助動詞の史的研究』

注5 佐伯梅友『奈良時代の国語』

注6 伊藤博『萬葉集釋注三』

注7 小学館新編古典文学全集『萬葉集』参照。

注8 注4に同じ。

注9 澤瀉久孝『萬葉集注釋』

注10 吉田金彦『上代語助動詞の史的研究』にも、あらし、けらし、ならしは、それぞれ、あり、けり、なりの形容詞化したものとする。

注11 塚原鉄雄「いわゆる推量の助動詞」（国文学4巻2号）

注12 築島裕「終止形に続く助動詞」（解釈と鑑賞22巻11号）

注13 鶴久「上代語の借訓仮名と母音脱落現象をめぐって」（萬葉66号）参照。

注14 拙稿「抱くについて―国語史的観点から―」（文藝と思想61号）

注15 注4に同じ。

いわゆる推量の助動詞「らし」の本質について

注16 注2の拙稿において、「あ」に「り」が接して一語化する以前に「り」が形容詞化したもので、「あ+り+し」で「あらし」となり、それが「あり」の一語化と共に「あらし」も一語化し、とのべ、また「けらし」についても、「け」と「り」が接して一語化する以前に形容詞化したもので、「あらし」と同様「けり」が一語化すると共に「けらし」も一語化したと述べたが、「あり」「けり」が一語化したのち形容詞化したものとする方が、例外なく説明がつくようである。

注17 『新編国語史概説』（有精堂刊）参照。

注18 山田孝雄『奈良朝文法史』

注19 注9に同じ。

注20 鶴久「古代の表記法について―比較文化・文学の視点から―」（和漢比較文学叢書2）所収）参照。

注21 注2において述べた一五九、四五一〇番歌の解釈に少し訂正すべき点があり、今一度言及することにする。

注22 注12に同じ。

注23 高木市之助『大伴旅人・山上憶良』（日本詩人選4）

注24 中西宇一「らしとらむの推量性」（『古代語文法論助動詞篇』所収）

注25 稲益保寿「らしの展相素描―万葉集を中心として―」（薩摩路21号）

注26 鶴久『萬葉集訓法の研究』、「文字用法に基づいた『万葉集』の訓法について」（『万葉集の世界とその展開』所収）参照。

注27 注4に同じ。

注28 我身こそ浪に見るめはかきたえて（宗祇） 聞くらし人

も中のうら風（印孝）の例が見られるが、史的展開も含めて検討の必要があろう。

注29 福田良輔『上代の国語』（講座日本文学上代編Ⅰ）参照。

注30 小松登美「和泉式部歌のめりをめぐって」（跡見学園短期大学紀要23集）

※『万葉集』の用例及び訓みは、『萬葉集』（桜楓社刊）、『訳文萬葉集』（おうふう刊）によった。

（付記） 二校を終えた段階で、仁科明「見えないことの顕現と承認―「らし」の叙法的性格―」（『國語學195集』）を見た。同論文の中に、拙稿（本稿注2）に関して、「断定するだけの確実さを持たぬが故に推量を行う」という意味においては、「らし」を推量とするのと同じであると述べられている。しかし、断定する確実な根拠を有すると考える故、推量ではないと述べたつもりである。断定の婉曲表現は決して不確実さ故の表現ではない。言うまでもなく、日本語においてはこの様な表現は多分に行われていることである。拙稿の主旨とは全く逆の理解がなされていると思われる故、掲載誌が「國語學」と言うこともあって一言付言させていただく。